

学校の取り組み

聖徳大学附属小学校の「読書推進」と「読書感想文指導」について

千葉県松戸市 聖徳大学附属小学校 校長
三 須 吉 隆

本校が読書推進において最も大切にしていることは、「子供たちが本を読むことが好きになること」です。まずはそのための環境を整えることからスタートいたしました。

毎日の学校生活は正に読書から始まります。子供たちは、様々な方面から登校時間内にそれぞれに登校いたします。登校した子供たちは、制服から校内着に着替えると、学習用具を整え着席します。本校は学校生活の始まりのこの時間を「読書タイム」としています。教室は落ち着いた空間となり、穏やかに心が整う時間が流れていきます。子供たちは、自分で選んだ好きな本に目を落とし、読書に没頭していきます。この「読書タイム」は、他の学習時間の中や学校生活の中で生まれる「隙間時間」でも活用されます。時間ができると、子供たちは自然と本を開き、読書を始めます。この、本がいつでも手元にある環境が、本が好きな子供たちの姿につながってまいります。

また、本校では低学年に「図書」の時間を授業として設定しております。この時間に新しい本の紹介があり、そして感想文の基礎指導が実践されます。

新しい本に出会い、その本をじっくり読むと、自分とは違う世界や自分では体験できないような世界、自分とは異なる考え方や生き方などとの思いもよらない素晴らしい出会いも生まれます。読むことで世界が広がり、考える力、想像力、感性も磨かれます。

そして読書後、感想文に取り組むときには、感想文を書きながら本に対する考えがより深まり、一読した時には気づかなかった異なる視点から見た考えが生まれることもあります。感想文を書くことで、その本を読んで得られる財産の価値は、何倍にも膨らむものです。

これからも読書を奨め、そこから感じたことや考えたことを言葉にし、文章にしたためることで、表現力を豊かに育めるよう、学びを継続してまいります。

また、本校には「読書感想文指導」とともに、力を注いでいる学習活動がございます。それは、学習の「振り返り」です。各学習・各行事等の終了後、学習全体・行事全体を、そして自分自身を振り返り文章化する実践です。この積み重ねによる文章力の向上は計り知れないものです。これらの「振り返り」からは、活動に対する、その学年ならではの捉え方、心の動き、学習・行事を通して子供たちの心と身体が成長している様子が伝わってまいります。

「振り返り」とは、「成果と課題」を意識してまとめていく学習実践です。学習・行事を通して「自分はこんなことができるようになった」「今までの自分だったら、きっとここまで頑張れなかった」のような成果、自分自身の向上的変容・成長や、仲間や上級生の頑張りに気づき影響を受けたことを、自ら振り返り自覚すること。また、「今回の取り組みはここが残念だった」「さらにこうすれば良かった」のような課題に気づくこと。「振り返り」は、やり遂げた自分に自信を持つことにつながり、次の学習に向けての意欲につながるものです。それぞれの学年の発達段階で、そして一人ひとりに、全く違う「振り返り」があります。正解は一つではありません。これからも様々な学習後、「振り返り」を重ね、子供たちの成長につなげてまいります。

そして、この「振り返り」の実践は、これまでと同様に、「読書感想文」に代表される、子供たちの文章力の向上の土台を築き上げていくことを確信しております。



▲「てのひら文庫賞」読書感想文全国コンクール最優秀校表彰の様子

エッセイ

読書感想文とわたし



児童文学作家
「てのひら文庫賞」読書感想文全国コンクール中央審査委員
石 井 睦 美

今はいくつかの選択肢から選べるということだけど、夏休みの宿題といってわたしが思い浮かべるのは、読書感想文だ。そのあとから、そういえば、自由研究もあったな、あとドリル形式の夏休み帳と、絵も描いたようなと、遠くに去ってしまった夏休みの宿題が芽づる式に出てくる。今より昔のほうが宿題の量は多かったのかもしれない。

あのころはまだ、真夏でも今みたいな過酷な気温というのが少なく、暑い暑いけれど、一日中エアコンをつけることなんてなかった。だいいち低学年のころは、エアコンそのものがなかった。だから、「朝の涼いうちに宿題をしちゃいなさい」という母の言葉を朝ごはんのときに聞くたびに、そういうことを言う大人にはなるまいと思った。やることをやってみればあとは好きに時間を使えるでしょということだろうけど、あのときはいやだったな。

それでも夏休みはすばらしかった。学校に行くのをいやだと思ったことはないのに—正確に言えば一年に何度かはあったけど—、ずうっと休みが続くのはうれしい。だって、明日も明後日も本が読めるから。

本が読める、と思うわたしは、本が好き、本を読むのが好きな子供だったのだ。ただ、本ならどんな本でもいいかというとそうではなくて、断然、物語。物語ならどんな物語でも読めた。

つまりフィクションを好んだわけだけど、ノンフィクションでも偉人の伝記はずいぶん読んだ。フィクションは実際に起こったことではないし、実在の人物ではないけれど、物語のなかでみんな、ほんとうに生きて行動している。伝記は実在のひとの人生を描いていて、そこに物語があるのだと思う。

夏の長い午後、ひとりっこだったわたしは、だれにもじゃまされずに本を読んだ。読みはじめのときはたしかにいる自分というものが、次第になくなっていく感覚、そして本を閉じると、また自分が戻ってくる感覚も魔法のようだと思っていた。

物語を読んでいるあいだは、ここではない場所に行って、このあいだまで知らなかっただれかの冒険に立ち会ったり、日々のできごとに寄り添ったりして、物語に登場こそしないが、そこにいる彼女らとともに生き、友だちのような感覚でいる。

そして、本を読む前と後とでは、ものの見方や感じ方がちょっとちがう自分になっている。その変化にいちばん気づくのが、本の感想を書き留めることだろう。

そうか、わたしがこの本を読んでこころを動かされたのは、このひとのこんな行動に、こんな気持ちに共感したからだ。そして自分もそんなふうでありたいと思ったのだ。というように、書くことでちゃんと気づくことができる。

気持ちという形のないものを、言葉によって定着させる。それが感想文だ。

まるで、物語のなかのひとたちに、自分が味わった感動や見知らぬ世界へといざなわれたことへの感謝を伝える手紙のように、わたしは感想文を書いていたように思う。

感想文を書くことで、本との距離は確実に縮まる。その証拠に、その本が本棚でじっとしているときも、背表紙が目に入れば、そこで起きているあれこれをはっきり思い起こすことができるようになる。

夏休みの宿題の感想文だけでなく、いつのまにかわたしは、専用のノートに、本の感想やすばらしいと思う描写を書き写すようになった。

学校を卒業してずいぶん長い時間が経った今でも、それは続いている。